▲Runczechは「世界遺産の街」プラハをはじめ、複数の街でレースを開催している。写真はプラハハーフマラソン

# チェコのロードレース運営会社「Runczech」での研修記

## 日本の大会運営改善へのヒントを探る 後編

早稲田大学本庄高等学院 教諭　田邊 潤

**前編ではチェコ共和国にあるロードレース専門の運営会社「Runczech（ランチェック）」を紹介し、開催するレースの様子をお伝えしましたが、後編では、具体的な運営と演出、そして合理的なレース運営をどのようなかたちで日本のレースや陸上競技会運営に生かしていくかについてのアイデアをご紹介したいと思います。**

### 「All runners are beautiful」がレース運営のモットー

Runczechのレース運営の目標は、「All runners are beautiful」という言葉に集約されています。創業者のカルロ・カパルボ氏はイタリアのナポリ出身。まるで太陽を背中に背負って仕事しているような、エネルギッシュで陽気な人です。イタリアの大学でMBA（経営学修士）を取得後、アメリカの大学に留学。その後、アメリカとヨーロッパの企業で成功を収めた後にプラハでRunczechを創業しました。

チェコ出身のレジェンドランナーであるエミール・ザトペック氏（1952年ヘルシンキ五輪で5000m、10000m、マラソンの3冠王）と親交のあったカルロ氏は、友人のイタリア人でソウル五輪マラソン金メダリストのジュリンド・ボルディン氏と話す中で、プラハでマラソン大会を開催することを思いつきます。

当時のことをカルロ氏は「共産主義からの変化に戸惑って家に閉じこもることの多かったチェコの人々に、街に出て自己表現する機会を作ってあげたかった」「ランナーの喜ぶ姿、笑顔が見たかった」と話します。

このアイデアはプラハマラソンの開催に結びつきますが、共産主義時代が長かった当時のチェコ社会にはボランティアの発想がなく、レース運営を手伝ってくれるようなボランティアを集めるのにとても苦労したそうです。

そんな中で、プラハマラソンは年々参加者数を増やし、運営ボランティアを育成するシステムも整い、Runczechはカルロ氏の母国・イタリアの大会を含む複数の大会を年間にわたって運営する規模に成長しました。

▶Runczech社内の喫茶コーナーでカルロ氏を中心にミーティング

創業以来25年を経たRunczechの標語が「All runners are beautiful」です。

「私はレースの規模を大きくすることや、記録が出るレースを作ることには興味はなく、すべてのランナーが走る喜びを感じられるレースを開催したいのです」

そう話すカルロ氏の利益優先でない考えは、多くの協賛企業を動かし、開催希望の自治体も増えていきました。チェコの人々の心身両面にわたる健康な生活に大きく貢献している会社がRunczechであり、社員と契約社員、そしてボランティアの方々が誇りを持ってレースを開催している理由がよくわかりました。

### 年間で複数の大会を開催するメリット

Runczechの運営するロードレースはチェコ国内の複数の都市とイタリアのナポリとソレントで開催されます。社員と契約社員たちは、各地からの参加受付、ナンバーカードの制作、招待選手、タイム計測、表彰、ボランティアの配置等の各部門に分かれて通常業務を行います。開催地からの補助金が少ないため、開催にかかる経費を捻出するためにはスポンサーの獲得が重要で、財務部門の社員はそのために年間を通じて忙しく働き、その結果、自動車会社、保険会社、飲料会社等の大企業がメインスポンサーとして名を連ねています。

▲プラハ10kmレースにおいて招待選手の国の国旗を持って入場するボランティア

▲会場を盛り上げるドラム演奏チーム

▲各レースともプロのアナウンサーが巧みなトークで会場を盛り上げる

▲Runczechはランナーの笑顔を生み出す大会運営を目指している

開催当日の道路バリケート、移動式トイレ、テント等の設置と撤収の重労働は、それぞれの専門業者がスポンサーに入っているため業務が素早く、レース前日から準備が始まり、最終ランナーの到着後3時間で中心広場は奇麗に清掃され、翌朝からは通常通りの街に戻る素早さには驚かされました。

レース開催のための準備と当日の業務は多岐にわたりますが、年間を通して繰り返されることで各部門の業務が効率よく合理化され、その時間的な余裕は参加するランナーたちに感動を与える演出のアイデアにつながっていると感じます。

レース開催を盛り上げるドラム演奏、設置された舞台での歌や踊り、華やかに指導する準備運動トレーナー、旗を背負ったペースメイカーチームの入場、参加者の国旗入場、招待選手の紹介、インタビュー……、チェコ語と英語を交えたテンポ良いプロのアナウンスは集まった観衆をワクワクさせるもので、スタートの号砲からは一転クラッシクの名曲「モルダウ」の流れる感動のスタートへつながっていきます。

ランナーたちのスタート後も、中央広場にある企業のテントブースには多くの人が集まり、次々と戻ってくる選手たちを迎える観衆の大きな拍手が会場に響きます。ゴールした完走者にはボランティアが笑顔で完走メダルを授与。レースがまだ続く中、上位の表彰式はゴール横の表彰台で行われ、荘厳な雰囲気の中でチェコ特産のクリスタルカップが授与された優勝者の国歌が流れます。

そして、最終ランナーがゴールに近づく中でRunczechのスタッフとボランティアもゴールに集まってきます。温かなおもてなしの心がこもった大きな拍手でレースを締めくくるシーンを見て、私はとても感動しました。Runczechのレース演出は、ヨーロッパの華やかさと重厚さを合わせ持った一つのアート作品のようでした。

### Runczechの方式を日本の競技会運営に生かす！

スポーツイベントに自治体や学校が大きくかかわる日本とは異なる民間会社のロードレース運営について紹介しましたが、このようなシステムを日本のロードレースや陸上競技大会運営に生かすための方法について、最後に述べたいと思います。

ロードレースにおいては、日本でも実際には自治体とイベント会社が協力して運営していますので、それらの会社がロードレースと陸上競技大会の運営に特化したかたちで年間を通して複数の大会運営を行うというプランです。都道府県や地方ごとに運営会社が分担するには、専門業務に特化した契約社員と有償のボランティアが必要ですが、シニアを中心に養成できないかと考えます。

▲スタート前の準備運動シーン

▲ウスチーナドラベム・ハーフマラソンでは車いすのレースがプログラムされ、チェコ国内選手権に指定されている

▶プラハ10kmレースでの男女ペア部門の表彰シーン

▼ウスチーナドラベム・ハーフマラソンでペースメーカーを務めたチームと。左から10人目が筆者

また、陸上競技大会に関しては、退職した学校教員を中心とした契約審判集団の協力のもとでの大会運営が現実的でしょう。競技会運営が学校教育の枠から離れ、ナンバーカード等に企業スポンサーからの協賛が得られることが可能になれば、運営資金が潤沢になり、審判への謝金も増やすことができ、プロスタッフの指導により、盛り上がるアナウンス、感動的な表彰、読んでおもしろいプログラム等、さまざまな演出につながります。民間会社の運営で、陸上競技会は参加者と観客にとってより魅力的なものとなるでしょう。

学校部活動に外部指導者の導入が叫ばれる中で、大会運営の民間委託は部活動顧問業務の軽減につながります。年間を通して社員が雇用されるロードレースと陸上競技会に特化した民間運営会社は、退職者の受け皿になりながら自治体と学校教員の仕事を軽減し、地域のスポーツと健康づくり活動へ貢献できるのではないか、そんな夢を描いてこの連載のまとめとしたいと思います。

**Runczech情報**
**https://www.runczech.com/**